

在りし日「奥西木工」追憶

ランチきっかけに再起

調理担う谷山富美子さん

京田辺市にある「さんさん山城」(新免修施設長、藤永実管理)は2011年の開所以来、聴覚障害を持つ人の就労支援から、知的障害がある若年利用者も年々増えている。地元ゆかりの産物を栽培、収穫する農業をはじめ、喫茶、縫製、販売などの部門でそれぞれが持ち味を発揮し、時に横断的に活動する利用者や職員の日々、現在に至る「人生賛歌」をシリーズで綴る。

80歳を過ぎてなおコミュニティカフェに欠かせない存在となっている谷山富美子さん(81)は旧姓・奥西で、草内地区に生まれ育った5人きょうだいの三女。面倒見がよく世話好きだったという長兄をはじめとする2男3女の末っ子。生まれる



直前に父は亡くなり、農作業を含めて母が屋台骨を支えた。長兄は、富美子さんと同じく聾(ろう)の次兄のことも常に気に懸け、やがて地域で誰もが知る「奥西木工」を協力して築くと、きょうだいのみならず、京都や奈良の聾学校を卒業した生徒たちを積極的に雇い入れ、現代風で言う「ユニバーサル」企業の先駆者となった。



17歳の頃から手伝いに入った奥西木工に就職した富美子さんは27歳で同僚の男性と結婚。長兄がキューピットとなり、当時は市民の日常の暮らしに溶け込んでいた桐箆(きりだんす)を作る家具職人だった夫、義理の

両親と同居が始まった。丹波から移り住んだ義父母と新生活をスタートさせ、「ほんまは夫婦だけで暮らしたかった」との本音も心の片隅に仕舞いつつ、仲良く折り合えたという。1970年代の高度成長期、80、90年代のバブル期へと変遷。嫁入り道具として、立派な桐箆をはじめ、化粧台などが飛ぶように売り上げを伸ばした羽振りのよい時代と重なる中、富美子さんも桐箆を薄く削った板を合わせ機械に通す作業、箆箆カバー、婚礼用の紅

白リボンなどの思い出は走馬灯の如く脳裏に蘇るといふ。富美子さんが60歳、同じく聾の夫が63歳と、定年まで勤め上げた。その後、奥西木工は業績不振で倒産。栄華を極めた近鉄寺田駅前のショールームと事務所跡には今、高級マンションの入居が始まっている。還暦を過ぎて、茶摘みの時季になれば近隣の茶農家に出掛け、「厳しく仕込まれた」とも。のちに、さんさんで「とても上手い」(新免施設長)と高評される下地を養った。また一方で、聴覚障害者らの生活支援を行う自主的なたまり場「とまとの会」に夫と参加し、活動がつながって、さんさんの立ち上げから夫婦で関わりを持ち続けている。さんさんで農作業に励んだ夫と5年前に死別。約1年間のプランクを乗り越え、コミュニ

長から感謝状を手渡さ一月11日にスタート 県一斉集協連会の会長とし

暑中お見舞い申し上げます

J A 京都やましろは、「食と地域

暑中お見

寿司・割